

この時は、光点が1907年の時ほど明瞭でなかったようである。環消失の近くで、2月20日と21日に、E. C. スライファーが写真撮影を行った。21日の方が環が明瞭に見えたそうであるが、光点は撮影できなかった。それ以後、今日に至るまで、光点の写真観測は誰も成功していないようである。光点に見えるチャンスが少なく、写真乾板が発達した後は、撮影の機会にめぐまれていないせいだろうが、奇妙にも思えることである。今年こそこの写真が得られる年になるだろう。

1936~37年及び1950年の観測は、両方とも条件が悪くて成功しなかったことは前に述べた。

§ 9 観測上の注意

土星環の光点に関する観測やその議論は以上の通りで、20世紀に入ってから、観測のチャンスに恵まれなかったこともあって、ほとんど足ぶみ状態となっている。最近では写真材料や、その他の観測方法の技術が進歩して、アマチュアでもかんたんにその技術を利用できるようになっているので、今までにない成果を、多くの人が挙げることが期待される。

観測を希望される方は、次の点に注意されるとよいだ

ろう。それは、土星の環の平面を、地球が通過する時、及び太陽が通過が通過する時は、1時間くらいの間で景観が変化することがあるから、その変化を記録すること。特に光点の光度と位置が測定できるような写真を撮影することは、今までにない貴重な資料をのこすものであるから、多くの方が試みられることを望むものである。

なお過去の土星の観測結果を集約したものとしては、A. F. O'D. Alexander, The Planet Saturn, 1962を読むことをおすすめする。本稿の記述も大部分これによった。

(42頁より続く)

A_p 星の光度及びスペクトルの週期的変化を説明するためには、脈動説と自転説とがあり、現在 A_p を研究している人の約2/3は斑紋自転説に傾いている。それにもかかわらず私は、少くともHD 221568に関する限り、斑紋を持った星が脈動すると考えざるを得ないと思っている。

以上、シンポジウムの講演のあらましを紹介したが、重要な講演でも Ledoux や Roxburgh による理論の展望など省略したものも多いことを附記しておく。

西村製の

30 cm 反射望遠鏡

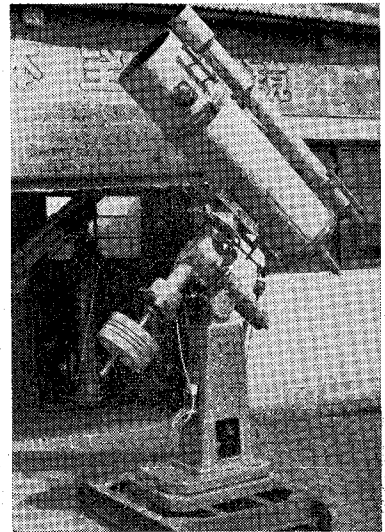
下記へ納入して好評を博しております

米 ゴッダード・スペース・フライト・センター
 ハインド J R 短期大学
 ムレ大学
 英 オックスフォード大学
 スイス バーゼル大学

株式会社 西村製作所

京都市左京区吉田二本松町 27

電話 (77) 1570, (69) 9589



30 cm 反射望遠鏡

ニュートン・カセグレン兼用

昭和41年1月20日

印刷発行

定価70円(送料6円),

地方売価75円

編集兼発行人

印刷所

発行所

東京都三鷹市東京天文台内

東京都港区西新橋1丁目21番8号

東京都三鷹市東京天文台内

電話武蔵野45局(0422-45)1959

広瀬秀雄

笠井出版印刷社

社団法人日本天文学会

振替口座東京13595